

WHILL MAGAZINE

2018-19
DEC.-JAN.

12・1



WHILL MAGAZINE

2018-19
DEC.-JAN.

12・1





お客さまインタビュー
TAICHI NAKAMURA VOLUME. 34

中村太市さん

俺なんか
生きていな方がいい。
7年間、笑顔と会話の
ない家庭でした。

長野県でロッジ経営や山岳救助など、
山と共に過ごされてきた中村様。
要介護4の認定を受け、介護保険レンタルで
2018年の春からModel Cを利用されています。
WHILLに乗るようになってから、頻繁に出向くようになった
「あづみの公園」でお話を伺いました。



誰にも会いたくなかった。

7年前に大けがをし、その半年後に脳梗塞にも見舞われ車椅子生活が始まりました。最初に乗っていた電動車椅子は横幅が大きく、ちょっとした段差も乗り越えられないため行動範囲が制限されていました。車椅子に乗った自分に対して同情や差別のような視線を感じることもあり、次第に外に出ることが嫌になって部屋に閉じこもりがちになりました。「動けないし、仕事もできない。俺なんかもうダメだ」と家族に当たることもありました。ある時、病院でたまたまWHILLに乗った若い方の姿を見かけたのですが、一目見ただけで、自分の行動範囲が広がりそうだと感じました。ただ当時は、その近未来的なデザインから、病院の特別な機器であって、市販はされていないだろうと思いつ込んでいたんです。しばらくして、以前の電動車椅子をレンタルしていた会社から「こんな製品が出ましたよ」とWHILLの紹介を受け、すぐに試乗させてもらいました。

好きな場所に行ける。

けがをする前と変わらないと思えた。

WHILLに乗るようになってからは妻と夕日を見ながら散歩したり、今年から再開した油絵の画材を買いに行ったりと、穏やかな時間が増えました。天気のいい日はWHILLを車に積んで、家族と一緒に大好きな山に行くことが何よりの楽しみです。周りから「若返った」と言われるのもささやかな喜びです。



お客さまインタビュー
MASAYO TAKAMINE VOLUME. 35

高嶺正代さん

症状が進行しても
外出を諦める
必要はない。

沖縄県にお住いの高嶺様は、保険代理店の会社経営を共同経営者と共に勤められています。2006年に神經原性筋萎縮症を発症し、症状の進行により5年前より電動車椅子を使用するようになりました。発症以前は、営業活動などで精力的に飛び回っていたという高嶺様。WHILLに出会って病気に対する考え方には変化があったそうです。



もっと重度障害者でも使いやすいオプションを。

WHILLを使い始めた頃は標準のマウスタイプのコントローラーを使用していました。しかし、徐々に握力が弱っていき操作が難しくなったと感じていた頃、Uシェイプタイプのコントローラーが新たに発売されました。他にもどんどん新しいオプションが発売されています。進行性の難病患者としてはとても嬉しいです。これからもこういった姿勢で開発を開けていってほしいと思います。

私には外出する使命があります。

まだまだこの日本でも、街も家もバリアフリーではないところが多く、人の心にもバリアが存在していると感じます。私のような車椅子ユーザーがもっとWHILLに乗って出かけていくことで、街も人の心もバリアフリーになっていく信じています。

※今回のWHILL MAGAZINEは特別号として、2名のユーザー様のインタビューをお届けしました。

WHILL株式会社

〒230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-1-40
横浜市産学共同研究センター実験棟F区画

📞 0120-062-416 (IP電話の方: 050-3085-9840)
受付時間: 9:00~19:00 (平日)
HP: <https://whill.jp>

やりたいことが湧いてくる。

今年に入ってからは個展を開催し、油絵を通じて多くの方に山の魅力を伝えることができました。今後は釣りをしたり、ロッジのお客さんに料理を振る舞うなど、自分らしい生活を取り戻していきたいです。

CARE MANAGER ➡ 担当ケアマネージャー様より

私自身、9年間ケアマネをしていますが、中村さんのケアプランを作成するまで、ケアプランに電動車椅子を含めたことがありませんでした。電動車椅子の事故がニュースで取り上げられるので敬遠していたのかもしれません。しかし、中村さんがWHILLを使い始めてからまるまる元気になっていく様子を目の当たりにして、自立の意欲のある方は操作できることを確認の上、ご利用いただくべきだと思いました。中村さんのようにご病気によって引きこもりがちになってしまった方の主体性を取り戻す力が、WHILLにはありますね。

利用されているショートステイでも周囲から声をかけられることが多く、コミュニケーションが増えたと伺いました。奥様は、以前の折り畳み式では車載に苦労されていましたが、分解して車載できるようになったのでとても楽になったご様子。WHILLの機能やデザインはご本人だけでなく、ご家族の負担や気持ちも楽にしていると思います。もちろん合う合わないはありますが、ケアマネとして利用者さんの「なりたい姿」を考え、勧めていくことが大切だと思いました。

「すみません」ばかりの外出でした。

発症後、徐々に歩行困難になり電動車椅子を探しましたが、乗りたいと思える製品がなく、仕方なく介助式車椅子をヘルパーさんに押してもらって外出していました。介助式車椅子は押してもらえるので楽ですが、ずっと使っていると自分の行きたい所に自分で行けないことに不満が募っていました。5年前に外国製の電動車椅子を補装具費支給制度で購入しましたが、外国人用に作られているため小柄で細い私には大き過ぎて、人通りが多い所では周りの人にくつからぬか不安でした。今まで通り仕事をしたい。外に出たい。そう思っていても、普通の車椅子だと通れないところを気にかける必要があり、小回りも利かないで周りの人に「すみません」と何度も言う必要があります。何度も謝りながら外出していると、どんどん気持ちが落ち込んでしまいました。

「乗りたい」と思える車椅子は初めてでした。

人混みでもスムーズに使えるコンパクトな電動車椅子がないかと探していた頃、WHILLのホームページにたどり着きました。WHILLを初めて見たとき、自分の中で大きな変化が起こりました。「乗りたい」と思ったんです。車椅子に対して自分から「乗りたい」と思うことなんてありえないと思っていました。症状は進行していますが、当たり前のように食事に行ったり買い物に行ったりすることを諦めなくてもいいんだと、WHILLを使い始めてから思えるようになりました。